

図書資料とICTの併用 ～それぞれの利点を生かして～

小牧市立米野小学校 井手 知里

1 はじめに

小牧市では、自ら本に手を伸ばす児童生徒を育てるために、様々な取り組みをしている。学校図書館司書が週に1回各学校に来校し、選書や図書室の整備などを行い、図書環境を整えている。また、市立図書館が行っている配本サービスを利用することで、幅広い種類の本と出会うことができる。さらに、月に1回程度、各小中学校の図書担当者による学校図書館教育研究会を開催し、授業実践報告や情報交換を行っている。これまでも授業実践報告会を通して、図書室の「学習・情報センター」としての機能を意識し、図書資料をいかに授業に取り入れていくかについて、研究を進めてきた。

児童生徒の読書離れが懸念されるなか、昨年の秋には、児童生徒に一人一台のタブレット端末が貸与され、様々な授業で活用が始まった。そこで、研究会では、図書資料とICT機器のそれぞれの良さを生かした授業が展開できないかと、本研究に取り組んだ。タブレットは児童生徒にとって扱いやすく、社会や理科での調べ学習以外にも、ふりかえり等を入力してノート代わりに使ったり、作品や活動の様子を撮影してデジタル鑑賞会を開いたりして活用している。ここでは、中学校における授業実践を紹介する。まずは従来の図書資料を活用した実践を3つ、続いてICT機器を活用した新しい取り組みを2つ紹介していく。

2 具体的な実践

(1) 図書資料を活用した授業実践

① 3年国語「読書に親しむ」

～新書を読もう～

ア 研究のねらい

読書が好きな生徒は多いが、読んでいる本はライトノベルが多い。また、手に取る本は小説に偏っており、他の分野の本に興味をもたない傾向がある。しかし、これからの生きる生徒には説明的文章を適切に読み取り、そこから考えたことを発信する力が求められている。そこで、朝読書の時間を活用して、生徒がいろいろな分野の本を知り、その面白さに気づくきっかけ作りをしたいと考えた。

イ 実践内容

11月 生徒数分（150冊）の新書の準備

- ・ 学校図書館司書に依頼し、図書室にある新書を移動式書架に集める。
- ・ 冊数が足りない場合や、分野に偏りがある場合は、市の配本サービスを利用する。

12月上旬 生徒に読む本を選ばせる

- ・ 学校の蔵書だけで 160 冊（複本も含む）そろえることができたため、配本サービスの利用はしなかった。
- ・ 書架を学年廊下に移動。
- ・ 授業で活動の意図を説明し、期日までに本を選んでおくように指示。

12月中旬～1月下旬 選んだ本を読む

- ・ 朝読書（8：15～8：30）に選んだ新書を読む。
- ・ 冬休み中の貸し出しも可。

1月下旬 読んだ新書の紹介

- ・ 授業で「内容の概要」「みんなに教えた情報」「考えたこと」をまとめ、発表。

ウ 成果と課題

図書室に点在している新書を一箇所に集め生徒に選ばせたことから、題名や目次から内容を想像したり、生徒同士で交流したりしながら本を選ぶことができた。幅広い分野の新書を集めたり短期間で本をそろえたりすることができたのは、学校図書館司書の存在が大きい。

読んだ新書の内容を交流することで、今まで興味をもっていなかったことを知ることができ、少し視野が広がった生徒もみられた。



学年の廊下に設置した新書コーナー

②1年国語「感じたことを整理する」「根拠を明確にして魅力を伝えよう」 作品を鑑賞しよう ～美術科とのコラボ授業～

ア 研究のねらい

文章をまとめる際は、目的や意図に応じて、簡単に書くことと詳しく書くことが求められる。どちらの場合も、書く内容の中心が明確になるように、また、読み手の立場に立って書き表し方を工夫できるようにさせたい。そこで、一般財団法人こまき市民文化財団が実施している「巡回ミュージアム」を活用し、美術科とコラボレーションをした授業を展開した。芸術文化への親しみや理解を深めるために、原寸大の複製絵画を鑑賞し、その魅力が伝わるように、相手や目的を意識し、根拠を明確にして文章をまとめさせた。「構図・配置」「対象」「色彩」「音」などの観点から、その良さについて根拠を明らかにして言語化させたいと思い、実践に至った。



巡回ミュージアム

イ 実践内容

「巡回ミュージアム」の時期に合わせ、鑑賞文を書く際の観点や、表現の仕方を国語の授業で

学習した。図書室にある画集を班で閲覧し、作品を班毎に一点選び、鑑賞文を書いた。

ウ 成果と課題

「きれい」「かっこいい」「すごい」など、絵画の印象を一語で発するのではなく、どこからそう感じたのか、また、より伝わるように表現するにはどういう言葉を選べば良いのかを班で丁寧に話し合う姿が見られた。美術の授業で行われた「巡回ミュージアム」における鑑賞文にも、その経験がおおいに活かされた。教科の枠を超えて実践することで、生徒の鑑賞の力も表現の幅も広がったように思う。



図書室で画集を見る

今回の実践では、図書室の画集を用いたため、画家や作風や時代など、ある程度絞られた中から作品を選ぶことができた。一人一台タブレット端末が用意された今、もしタブレットで検索しながら作品を一点に絞ろうとすると、膨大な件数から選ぶことの大変さ、項目や条件を絞って検索することの必要性が予想される。タブレットの便利さや活用法に注目が集まっているが、図書資料の良さも生かしていきたい。

③ 2年英語

“Let's introduce tourist spots in Japan to Karmela!”

ア 研究のねらい

今回のMTA (Meet the ALT の略。ALTと一対一で会話をする。)では、テーマを「カルメラ先生 (ALT) に日本のオススメの観光地を紹介しよう」とした。日本文化や観光地の情報を得るために図書資料を活用し、1年時に行った一方的な自己紹介とは違い、対話形式で行うことにした。自分自身が言いたいことを伝えるために、決められた表現を使うのではなく、既習の表現を自ら選んで使うことにより、英語は机に向かって学習するものだけでなく、コミュニケーションのツールだと再認識させたい。また、「生きた英語」を使うことで文法表現をより理解させ、一層意欲的に英語を学ぶきっかけとさせたいと考えた。

イ 実践内容

MTAの説明・準備 (場所：図書室)

決められたテーマのもと、MTAの準備をした。テーマに則しており、7文以上であれば内容は何を書いてもいいとした。多くの生徒はまず、『るるぶ』『まっぷる』『ことりっぷ』などの情報誌や城に関する本、日本文化に関する本等を使い日本について調べ、和英辞典を使ってスクリプトを作成した。

MTAの練習 (場所：教室)

スクリプトが完成していない生徒は、辞書を使って英作文をし、完成している生徒は教員による添削を経て、ペアで練習をした。ペアワークでは、互いにフィードバックをさせることにより、伝わり方を意識させた。



ワークシート①

男女に分かれてのMTA（場所：図書室・教室）

男女でMTA組と、教室で授業組の2つに分かれた。MTAの番ではない生徒は自習をさせ、練習時間で不公平さが出ないように留意した。図書室という環境もあり、静かに自習に取り組んでいた。

ウ 成果と課題

図書室は「静かにしなければいけない環境」という意識が働くため、集中して調べ学習に取り組むことができた。一人一冊の辞書に加え、豊富な資料があるため、知りたい情報をすぐに調べることができるだけでなく、ウェブサイトと比べて、ある程度、正確性が高い情報を得ることができた。授業後、授業の内容とは関係のない本も借りたいという声を多く聞いた。授業の中で本に触れることにより、本への興味関心が沸いたのではないかと考えられる。MTA以降は、図書室にいつも以上に多くの2年生の姿が見られた。

課題としては、複本が少ないため、読みたい本が重なってしまい、求めている本を読むことができない生徒がいたことが挙げられる。それを防ぐために、必要な本を想定し、計画的に購入しなければならないが、授業で使用するものは準備段階で気づくことも多く、注文・納品が間に合わないことが考えられる。また、図書館利用指導が入学時の1回だけのため、本の探し方がわかっていない生徒が多く、読みたい本にたどり着くまでに時間がかかってしまうことが課題として残った。今後は図書館案内の地図を複数用意するなど環境を整備していきたい。

(2) 図書資料と、コンピュータ室やICT機器を活用した授業実践

① 2年国語「職業ガイドを作る」

～職業ガイドを作ろう～

ア 研究のねらい

「2020年なくなる仕事」というものが世間で話題に上がり、生徒たちが大人になる頃には、今存在しない仕事が新たに生まれると言われている。また、生徒たちが触れたことのある職業、知っている職業には限りがある。

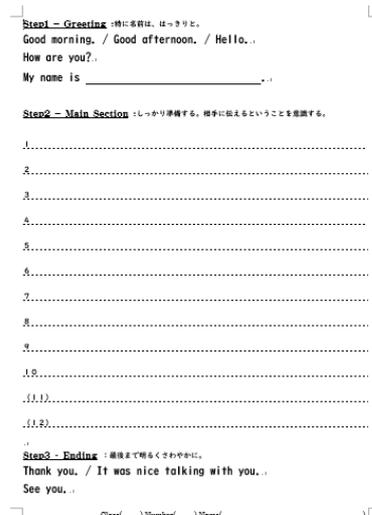
「夢」となる職業を見つけることは、砂浜で石を探すようなものだ。そこで、さまざまな図書資料やインターネットを使って職業ガイドをつくることで、多様化する職業について知るとともに、総合的な学習の時間を使って行う職業人体験につながるよう授業を行った。



図書室で本を探す

イ 実践内容

(ア) 授業の流れ（9時間完了）



ワークシート②

- ・「メディアと上手に付き合うために」池上彰（光村図書 2年 p56～）を読む。
- ・「情報コラム著作権について知る」（光村図書 2年 p60）を読む。
- ・「多様な方法で情報を集めよう 職業ガイドを作る」（光村図書 2年 p34～）の授業を行う。

- ① 調べる職業を決める→調べる内容リストを作成する
- ② 図書室で調べる
- ③ コンピュータ室で調べる
- ④ 職業ガイドを作る（2時間）
- ⑤ ガイドを読みあい、感想交流をする

(イ)「図書室で調べる」1時間の流れ

- ・図書室のどこに、関係する本があるかの説明（3分）
- ・各自で調べ学習（45分）
- ・片付け、まとめ（2分）



移動式書架で本を探す

ウ 成果と課題

何を調べるのかを明らかにしてから図書室へ行っても、どの本にその仕事載っているのかを探せない生徒が多かった。膨大な冊数の本の中から目的の本を見つけるには、生徒だけでは難しく、本に精通している大人の支援が必要だと感じた。授業者以外にも学校図書館司書の力を借りられるとよりスムーズに進められるのではないかと思う。（本校には、週一回、学校図書館司書が来校しているが、時間割の都合で今回は協力してもらっていない。）



調べ学習

今回は、調べる内容が「職業・仕事」に集中しているため、書架の一か所に生徒が集まってしまうだろうことが予想された。そのため、複数冊ある「なるにはBOOKS」を移動式書架に配置して、別の場所に置く工夫をして人が集中しないようにした。今後「学習センター」として図書室を活用していくのであれば、環境面の整備も欠かせない。

②3年国語「君待つと」

和歌を現代詩に Remix ～「Contemporary Remix “万葉集”」より～

ア 研究のねらい

本実践は、光村図書 HP「そがべ先生の国語教室」に掲載されている「古典を楽しむ(1)「Contemporary Remix “万葉集”」」を参考にした実践である。

視覚資料と共に和歌の世界を現代の感覚で読み直すという作業を通して、作者の意図や三十一音だからこそその研ぎ澄まされた言語感覚に触れてほしいと考えた。

昨年度から児童生徒に一人一台のタブレット端末が貸与され、授業支援アプリを利用して簡単にICT機器を活用した学習に取り組むことができるようになったことで実現した。タブレットを用いて、ネット検索も可能になり、和歌の意味や作歌の背景を各自で調べることもできるのだが、情報量が多すぎる、語句が難しく理解できないなどの弊害が見られた。そこで、

図書資料から目的に応じた情報を探し、和歌の読解に役立てることで、学習を深めることをねらいとした。

イ 実践内容

(ア) 学校図書館司書との連携

市立図書館の配本サービスを利用し、和歌について調べることのできる図書資料を複数準備してもらう。

(イ) 図書資料の活用

教科書に掲載されている和歌について、漫画で説明されているものや作者について説明されているものを用い、効率よく調べ学習をさせる。

(ウ) タブレットの利用

一人一首、気に入った和歌を選び、和歌に描かれた世界を視覚資料と現代詩で表現し、授業支援アプリを利用して作品として仕上げる。お互いに鑑賞し合い、各和歌についての理解を深める。



生徒作品

ウ 成果と課題

(ア) 手立てと成果

学校図書館司書との連携により、配本サービスの利用や、蔵書からの選書など、時間を取られる作業が軽減され、さまざまな実践に抵抗感なく取り組めた。

和歌の大意が書かれているだけでなく、漫画や文章表現で説明された図書資料を用いることで、効率よく、それぞれの和歌についての解釈を深めることができた。

タブレットを利用することで作品としての完成度が高くなるので、意欲的に活動に取り組んだ。同じ和歌を選んだ生徒同士の作品を比較し、読み手の想像が一言、一文字で変化することや、修辞技巧を使う効果について考えることができた。



図書資料の活用

(イ) 今後の課題

ICT機器と図書資料を併用することで、より学習効果が上がると感じた。それぞれの良さを生かすためにも、幅広い図書資料を用意し、調べたいという動機付けを工夫していくことが今後の課題として残った。

3 まとめと今後の課題

図書資料は、知りたい情報が一冊にまとまっているため、読みやすく、情報を収集しやすい。また、掲載されている情報には、ウェブサイト等と比較するとある程度の信憑性があり、安心して活用することができる。自ら図書資料のページをめくることで検索の幅が広がり、発展的な学習をすることも

できる。これらはICT機器にはない、図書資料ならではの良さの1つである。しかし、児童生徒にとっては、図書資料よりもICT機器の方が手軽であり、身近な存在となっている。ICT機器を活用すると、情報がすぐに得られるだけでなく、常に最新のデータを確認することができる。一方で、情報量が多すぎたり、語句が難しかったりするため、検索しづらく、必要な情報を得ることが困難という点もある。そこで、図書資料と併用しながら調べ学習をすることで、学びがさらに深まり、学習効果が上がることが期待される。より高い効果を得るためにも、図書資料とICT機器を使用する際のそれぞれの利点を、授業者も児童生徒も理解する必要がある。使用する目的を明確にしたうえで、授業内容によってうまく使い分けをし、今後も活用をしながら、より効果的な方法を見つけていきたい。学校図書館教育研究会においても、引き続き情報を共有しながら授業実践を蓄積していき、充実した授業展開ができるようにしていきたい。

なお、本市では、学校図書館司書の来校回数は、週一回と多くはないが、限りある時間の中で、図書室の整備や授業準備などをしてくださり、大変助かっている。図書資料に関して豊富な知識をもった学校図書館司書との連携を大切にしながら、今後も教育活動を進めていきたい。そのためにも、年間の授業計画に見通しをもち、図書室や図書資料を使った授業実践をする折には、学校図書館司書と早めに連絡を取り合いながら、依頼や準備を進めていく必要がある。さらに、令和3年3月に開館した小牧市中央図書館をはじめ、小牧市えほん図書館や市内3か所の市民センター図書室なども、学校図書館と合わせて積極的に活用していきたい。

今後ますます、ICT機器の活用が広まっていくことが予想されるが、「学習・情報センター」としての図書室の利用を広めつつ、図書資料のもつ魅力を学校中で再認識できるように、今後も研究を進めていきたい。



小牧市中央図書館